

源氏物語・枕草子における「もの」語彙・「こと」語彙

— 語彙研究の方法についての試論 —

東 辻 保 和

はじめに

「もの」「こと」両語については、従来いろんな角度から研究がなされてきている。

日本語表現において、この両語が、いかに重要な位置を占めているかは、この両語を用いなくても思考し、言語表現しなければならぬ場合を想像しただけでも明らかである。

過去の文献に徴するに、万葉集・源氏物語・徒然草三作品共通の名詞の中、その頻度において、「こと」が第一位、「もの」が第六位を占めており（注1）、また、枕草子では、「こと」が第二位、「もの」が第三位を占めていることを知る。（注2）。

これは、「もの」「こと」両語が、古来、重要なはたらきをしてきたことを物語る事実と見えよう。

「もの」と「こと」の性格がいかに異なるかについては、既に論ぜられても来たし、わたくしなりに、機会を得て論じたいと思っている。わたくしが、源氏物語で調査したところによれば、「もの」として把握せられる対象と、「こと」として把握せられる対象は、

対象として必ずしも固定的なものではなく、言語主体が、対象をいかなる角度から把握するかによって交替する、即ち、ある場面においては、「もの」として把握せられた対象が、他の場面においては、「こと」として把握せられる、という現象が認められる。

わたくしは、「ある言語主体が、何を『もの』として把握、何を『こと』として把握しているか——を調べることであれば、そこに、ある言語主体の個性的な発想法の発現と、独自の対象とを窺い知ることが、可能となりはしないか。」と考えた。

本稿では、以上のような立場から、源氏物語と枕草子（注3）とを資料として、素描を試み、御批判を仰ぐ次第である。

注1「万葉集・源氏物語・徒然草に於ける語彙の研究」楠瀬淳子氏（『学習院大学国語国文学会誌』3号）

注2「滑少納言の語彙」田中重太郎博士（『国文学解釈と鑑賞』29の13）

注3「対校源氏物語新釈」、「枕冊子」（日本古典全書本）を底本とする。

一 「文型処理」的方法

ある言語主体が、「もの」と考え、「こと」と考えている対象を、作品から抽出するために、「文型処理」的方法（仮称）を採った。

以下、例を源氏物語に求めて、この方法について述べる。

(1) その笛は、ここに見すべき故あるものなり（横笛191）

（数字はページを示す）

(2) 身をば又なきものに思ひてこそ（若菜上322）

右の例文では、「笛」「身」は、言語主体によって、「もの」の概念に関与せしめられている。「もの」として認識せられていると言ってもよい。論理的には、「笛」「身」は「もの」である、と言える。そこで、これら、「もの」として認識せられた対象を表わす語詞の集団を、「もの」語彙と名付けることとする。

(3) ただかやうに人に許されぬ振舞をなむまだならはぬ事なる（夕顔156）

（東屋22）

(4) 守、少将のあつかひを、いかばかりめでたき事をせむと思ふに

右の二例では、「振舞」「あつかひ」が、「こと」の概念に関与せしめられている。論理的には、「振舞」「あつかひ」は「こと」である、と言える。そこで、これらの、「こと」として認識せられた対象を表わす語詞の集団を、「こと」語彙と称する。

以上の四語詞は、いずれも、言語主体によって、対象が明らかに、「もの」あるいは「こと」として認識せられ、叙述せられている文から帰納して得たところである。

また、次のような場合がある。

(5) その宣命説むなむ悲しきことなりける（桐壺8）

(6) 明かきでだに^①出で給へと、やらひ聞え給ふよりはかの事なし。

（夕霧235）

右の二例で、「こと」の概念に関与するのは、厳密に言えば、「その宣命説む」「明かきで……やらひ聞え給ふ」である。語詞ではなく、いわゆる連体文である。しかし、文節理論に拠れば、(5)では、「説む」が、(6)では、「やらひ聞え給ふ」が、それ／＼先行の文節を受けていると考えられるから、「説む」「やらひ聞え給ふ」を、それ／＼の連体文の代表と考えることが可能である。更に、「やらひ聞え給ふ」という用言複合体では、内容の中枢をなすのは、「やらひ」であると考えられるから、「説む」「やらひ」を、(5)・(6)の「こと」語彙として帰納することが可能である。

以上のように、論理的に、「もの」語彙に属すると判定し得る語詞や、「こと」語彙に属すると判定し得る語詞を含む文を、文として抽出し、類型化してみると、次のような文型が得られる。

二、三、例を掲げる。この他の例は、紙幅の都合で省略する。

1.12 御手などはさるものにて（若紫97）

1.21 あやしき山賤のなかに出家し給へる事却りては、仏の責め添ふべき事なるをなむ承り驚き侍る。（夢浮橋255）

1.4 しどけなき諸王姿、いよ／＼譬へむものなし。（行幸138）

1.5 みづからの御宿世も、なほ飽かぬこと多かり。（横笛176）

1.6 又なくあはれるものはかかる所の秋なりけり。（須磨88）

2.11 ただかやうに人に許されぬ振舞をなむまだならはぬ事なる。（夕顔156）

中の戸ばかり隔てたる西ひんがしをだにいといふせきものに
し給ひて(竹河410)
うへの女房なども、よしあるかぎり、「これはかれは」など
定めあへるを此頃の事にはすめり。(絵合92)

1.11—(ハ)——モノナリ	1.11—(ハ)——コトナリ
1.12—(ハ)サルモノ(ナリ・ニテ)	<1.12—(ハ)——サルコトナリ>
1.21—コト(ハ)——モノナリ	1.21—コト(ハ)——コトナリ
	.22—程(ハ)——コトナリ
	.23—ノコト(ハ)——コトナリ
1.31——トイフモノ(ハ)——モノナリ	1.31——トイフモノ(ハ)——コトナリ
	.32——トイフコト(ハ)——コトナリ
1.4——(ハ)モ——ノナシ	1.4——(ハ)——コト(ハ)ナシ
1.5——モノ(ハ)——ナリ	1.5——コト(ハ)——ナリ
2.12——(ヲ)サルモノニテ	2.11——(ヲ)——コトナリ
2.21——(ヲ)——モノト思フ	2.12——(ヲ)——コトニテ
	2.21——(ヲ)——コトト思フ
.22——コト(ヲ)——モノト思フ	.22——コト(ヲ)——コトト思フ
	.23——ノコト(ヲ)——コトト思フ
2.31——(ヲ)——モノニス	2.31——(ヲ)——コトニス
.32——コト(ヲ)——モノニス	
2.41——(ヲ)——モノニス	2.41——(ヲ)——コトニス
41'——(ヲ)——モノニテ——ス	.42——コト(ヲ)——コトニス
	.43——ノコト(ヲ)——コトト——ス
3.2——ニ似ルモノナシ	2.5——(ヲ)——コトヲス
.3——ニ如クモノナシ	3.1——ヨリ——コトナシ

<>印は源氏物語には無く、枕草子にあるもの。

上記の文型は、源氏物語から帰納せられたものであるが、枕草子
から「もの」語彙・「こと」語彙を抽出する際にも有効である。二
三、例を掲げる。

1.11 夜居の僧は、いとづかしきものなり (322)

かつ女の目にもわろしと思ふを思ふは、いかなることにか
あらむ (343)

1.21 なほめでたきこと臨時の祭ばかりのことにかあらむ (351)

1.4 種先の蘇枳にいと濃きが、朝霧にぬれてうちなびきたる
は、さばかりのものやはある。(146)

1.5 弾くものは琵琶 (316)

たふときこと 九条の錫杖、念仏の回向。(377)

2.41 蠲こそにくきものうちにいれつべく (130)

まさなき言もあやしき言も、大人なるはまのもなくいひたる
を、若き人はいみじうかたはらいたきことに聞き入りたるこ
そさるべきことなれ (306)

以下の例は省略する。

なお、文型としては把えにくい例もある。左の如くである。

前後件(注)が例示と概括の關係にあるもの

黒貂の皮ならぬ絹綾綿など老人どもの着るべきもののためひ
(未摘花261)

木立など見どころあることもなし(枕39)

前後件が比較の關係にあるもの

よろづの事よりは、柳花苑まことに後代の例ともなりぬべく見
給へしに(花宴318)

よろづのことより情あるこそ、男はさらなり、女もめでたくおほゆれ(枕草子)

前後件が提示と解説の關係にあるもの
すきすきしう、あざれがましき今やうの事のびんない事しいで
などする、男のとがにしもあらぬことなり。(胡蝶)

以下、例文を省略し、項のみを立てる。

前後件が提示と指示の關係にあるもの

前後件が同格の關係にあるもの

前後件が条件と判断の關係にあるもの

前後件が反復の關係にあるもの

文型としては把えにくくても、前件と後件とが、論理的に關係しあっているの、ここから、「もの」語彙・「こと」語彙を抽出することが可能である。

(注) ある「存在」に関しての叙述が、二つの中核的概念を、關係的に結合することによって為される時、その中核的概念の前者を「前件」、後者を「後件」と呼ぶこととする。

二 「もの」語彙・「こと」語彙

一で述べた方法によって導き出された、源氏物語・枕草子の「もの」語彙・「こと」語彙を、文型毎に集計すると、次の第一表のとおりである。

凡例

1 「名」は「名詞」。「もの」語彙・「こと」語彙が名詞であることを示す。名詞以外は、厳密には、たとえば、「動詞」によって代表される成分」とすべきところを、便宜上、「動」などと略記した。

2 ()の数字は、「もの」という語詞が「もの」語彙に属する語詞として導き出されている例を示す。「こと」語彙の場合もこれに準ずる。計も、()の数字は、「もの」・「こと」という語詞を含む数、()のない数字は、「もの」・「こと」という語詞を除いた「もの」語彙・「こと」語彙の量を示す。

3 ※ハゝものはVとは、例えば次の如き文をいう。

見るものは臨時の祭。行幸。祭のかへき。御賀茂詣。(218)

ハゝものVとは、例えば次の如き文をいう。

大きにてよきもの。家。餌袋。法師。菓子。牛。松の木。硯の墨。(226)

次に、「もの」語彙・「こと」語彙を一覽にして掲げる。ただし、今回は、名詞に限って論を進めることにする。

①は、「基本語彙に関する二、三の研究」(『国語学』24集)において、大野晋博士がお示しになった四古典共通語彙に該当するもの。

②は、源氏物語語彙のうち、四古典共通語彙に該当しないもの。

③は、枕草子と源氏物語との共通語彙。

④は、枕草子にはあるが、源氏物語には見当たらない語彙。

である。また、()の数字は、度数(複数形・複合語を含む)を示す。度数は、「対校源氏物語新釈用語索引」による。

源氏物語
〔第一表〕

こ と						も の						
計	其他	形動	形	動	名	文 型	名	動	形	形動	其他	計
139	1	2	5	81	50	1.11	92	4	1			97
						1.12	13					13
(23)					(23)	1.21	4					4
(1)					(1)	2						
(3)					(3)	3						
1					1	1.31	(4)					(4)
(1)					(1)	2						
10				1	9	1.4	1					1
						1.5	13					13
2					2	2.11						
4				2	2	2	22	1	1		1	25
36			1	20	15	2.21	31	4				35
(18)					(18)	2	7					7
2				1	1	2.31	6	2				8
						2	1					1
19		1	3	6	9	2.41	7	2				9
(1)					(1)	2						
(1)					(1)	3						
(1)					(1)	.41'	2					2
6				2	4	2.5						
						3.1	9	3				12
						3.2	3					3
						3.3	3					9
22				4	18	例示・概括	9					9
3				1	2	提示・解説	9					9
						反復	2					2
2				2		条件・判断						
1					1	比						
2				1	1	提示・指示						
1				1	1	同格						
						前件が先行	1	1				2
2				1	1	センテンスに						
						其他						
(302)					(167)	計	(227)					(247)
253	1	3	9	122	118		223	17	2		1	243
100	0.4	1.2	3.6	48.2	46.6	比率(%)	91.8	7.0	0.8	0	0.4	100

こ と					も の				
計	形	動	名	文 型	名	動	形	計	
18	1	12	5	1.11	15	2	1	18	
				1.12	2	1		3	
(1)			(1)	1.21					
(1)			(1)	1.23					
(2)			(2)	1.32					
				1.4	※	1		1	
1			1	1.5	(このは 73)			80	
				2.12				1	
3		2	1	2.21	3			3	
1		1		2.31	2			2	
1		1		2.41	2			2	
(1)			(1)	2.42					
3		2	1	3.1					
1		1		提示・指示					
3		3		比					
1			1	例示・概括					
				同格	1			1	
(37)			(14)	計	(106)	(4)	(1)	111	
32	1	22	9						

枕
草
子

源氏物語

「もの」語彙

④ 香(2)・田舎(5)・鼻(20)・法師(27)・尼(45)・笛(52)・匣(53)手(55)・君(代名)(56)・舟(57)・宮(68)・輪(71)・香(80)・盛り(100)匂(101)・子(105)・男(110)・命(118)・末(124)・上(137)・秋(142)・為(153)・ね(音)(157)・辺(音)(168)・思(音)心(172)・涙(186)・それ(204)・かたち(235)・風(243)・顔(267)・声(267)・女(285)・これ(333)・われ(339)・わぢ(音)(362)・身(395)・宮(1144)・もの(物者)(1347)・方(音)(1387)・世(1610)・程(1769)・心(2741)・人(4238)・事(4339)

⑤ 手箱(1)・才学(1)・諸王姿(2)・文才(2)・桜花(2)・竜王(2)・紙絵(2)・物語絵(2)・白馬(2)・夏衣(3)・朧月夜(3)・西東(3)・三昧(3)・衝重(3)・望み(3)・物憎み(3)・木魂(4)・床夏(5)・律(5)・宇治橋(5)・袈裟(5)・御はかし(6)・御念誦堂(6)・横笛(6)・唐櫃(7)・今様(8)・功德(10)・綿(11)・狐(11)・櫛(12)・学問(13)・絹(13)・説経(14)・移香(15)・心げさう(16)・設け(20)・ちご(20)・古人(21)・憂さ(21)・あつかひ(21)・物いひ(21)・念仏(21)・下衆(22)・錦(23)・願ひ(23)・魂(24)・和琴(24)・御修法(24)・箏(25)・しよん(29)・綾(30)・歎き(33)・悲しさ(33)・行末(33)・琵琶(33)・琴(40)・闇(40)・別れ(42)・物怪(51)・中らひ(65)・御後見(66)・宿世(66)・装束(80)・用意(82)・北の方(206)・乳母(116)・几張(116)・御契り(139)・親(156)・志(170)・心(音)く(211)・世の中(250)・折(338)・けはひ(353)・有様(685)・けしき(708)

「こと」語彙

④ 千年(11)・あるじ(13)・雲居(22)・振舞(29)・煙(40)・初め(77)・男(110)・おと(113)・ね(音)(157)・罪(187)・それ(204)・かたち(235)・声(267)・女(285)・これ(333)・限り(531)・方(1387)・君(1501)・ぢぢ(音)(1787)・心(2741)・人(4238)・こと(4639)

⑤ さな心(1)・無言太子(1)・顔つき(3)・色好み(3)・祭祓(2)・嬉しさ(2)・のちのわき(3)・懺法(2)・忌む事(2)・僧坊(3)・みめ(3)・常なき(4)・あえもの(5)・独住み(5)・ぢぢ(音)(5)・垣間見(6)・衰へ(6)・焰(6)・争ひ(7)・法服(8)・はかなき(8)・すさびこと(8)・諫め(9)・御服(12)・心しらひ(11)・問はずがたり(13)・粥(13)・説経(14)・人聞き(17)・鈍色(17)・営み(18)・清ら(21)・あつかひ(21)・憂さ(21)・作法(22)・御賀(22)・つらさ(23)・手習(23)・修法(24)・御心惑ひ(25)・調度(26)・願(音)(27)・かしくまり(28)・まじらひ(29)・廊(33)・悲しさ(33)・いさぎ(34)・堂(35)・よろこび(35)・儀式(38)・折り(39)・闇(40)・心さま(48)・物思ひ(63)・中らひ(65)・御後見(66)・宿世(66)・行ひ(72)・装束(80)・用意(82)・ためし(88)・すまひ(93)・むすめ(114)・あはれ(122)・御心はく(211)・筋(217)・世の中(250)・けはひ(333)・有様(65)・けしき(708)・心地(823)

「もの」「こと」共通語彙

④ 男(110)・ね(音)(157)・それ(204)・かたち(235)・声(267)・女(285)・これ(333)・方(1387)・心(2741)・人(4238)・こと(4639)

⑧ 説経(14)、あつかひ(21)、憂き(21)、修法(24)、悲しき(33)、闇(40)、中らひ(65)、宿世(66)、御後見(66)、装束(80)、用意(82)、心ばへ(111)、世の中(250)、けはひ(353)、有様(381)、けしき(708)、

枕草子

「もの」語彙

⑨ 胸、心、雪、男、祭、こと(事)、藤、花、子、声、返りごと、未、雨、曇、顔、かき(笠)、所、程、言葉、家、法師、牛、松、山吹、女、人、者・物、水、舍人、犬、衣、神、舟、輪、春、夏、秋、冬、日、火、夜、風、仲、道、音、双六、物語、振舞、扇、糸、髪、裏、中、車、野、なでこ、桜、かたち、五月、香、殿、草、木、鳥、虫、それ、

⑩ 敵、琵琶、行幸、かへさ(帰)、こち、狩衣、袈裟、出居、少将、阿闍梨、汗衫、数珠、婿、従者、調度、椽、菓子、墨、酸漿、花びら、女親、かはらけ、鷹、すき影、御説経、御修法、乳母、験者、相撲、軀、けしき、葵、かはほり、網代、牛飼、産屋、節分、おこなひ、いそぎ、しはぶき、菘、物忌、むら濃、極楽、うしろ、ひぢかさ雨(腋笠雨)、生霊、直衣姿、冊子、まらうど(客人)、ちご、くずれ(崩)、廊、几張、曹司、折敷、糊厨子、燈台、欠伸、鴨跖草、蜘蛛、文章博士、縫目、藏人、御ありき、織物、山里、山路、菖蒲、僧、位、松の木、五月雨、帝、皇子、左右の衛門の尉、鸞、円座、下薦、

⑪ かりのこ、姫の君、毛抜、なめくぢ、笏、遣戸厨子、えせ者、舎

利の壺、水ふぶき、菱、餌袋、火桶、鏡、御齋会、人長、雀の子飼、凶会日、三才児、女主、炭櫃、地火爐、巻染、髪上姿、青淵、谷の洞、鱈板、鉄、土塊、暴風、ふさうぐも(不祥雲)、ほこ星(戈星)、荒野ら、くちなはいちご、鬼わらび、鬼ところ、荊、枳殼、いり炭(煎炭)、牛鬼、夜行姿、はしたもの、懸盤、中の盤、おはらき、衝立障子、かき板、提子、鉢子、覆盆子、胡桃、得業の生、皇太后宮の権の大夫、楊桃、大船、行啓、春日詣、唐錦、飾り太刀、もくゑ(木絵)、乞食、主殿司、蠅、棕櫚の木、梨の花、鸚鵡、賀茂詣、傘、童女、合子、走り火、

「こと」語彙

⑫ これ、それ、人、心、木立、

⑬ 九条の錫杖、回向、

「もの」「こと」共通語彙

⑭ それ、人、心、

⑮ ナシ

⑯ ナシ

三 考 察

1 「もの」語彙・「こと」語彙は、一作品の総語彙の中で、どのような位置を占めるものか、について、二つの観点から考察したい。

(1) 「もの」語彙・「こと」語彙に占める四古典共通語彙の比率

第二表は、作品毎の「もの」語彙・「こと」語彙の語彙量(異り語合計)、ならびに、四古典共通語彙の占める比率を示したものである。下段の「合計」が、上中段の合計数に合致しない理由は、両作品共に「もの」語彙、「こと」語彙双方に共通している語があるため、それを整理したゆえである。

【第二表】

種別	「もの」語彙		「こと」語彙				合		計	
	①異り語数	②四古典共通語彙	①	②	③	④	①	②	③	④
源氏物語	121	45	37.1	93	22	23.7	187	56	29.9	
枕草子	215	66	30.7	7	5	71.4	219	68	31.1	

この表によれば、両作品共に、四古典共通語彙は、殆んど同率を示し、これらの「もの」語彙・「こと」語彙が、約30%という四古典共通の基盤の上に存在することが判明する。

(ウ) 「もの」語彙・「こと」語彙に含まれる語詞の度数の分布状態

源氏物語における語詞の使用度数を検討してみると、度数(1)の「手箱」から、(433)の「人」に至るまで、バラエテ(イ)に富んだ分布を見せている。(枕草子は未調査であるが、徒然草の場合、「徒然草総索引」時枝誠記編によって調べたところ、度数(1)の「御房」から、(591)の「人」に至るまで、やはり同様の傾向を示していることがわかった。)

以上(イ)(ウ)の二点から、「もの」語彙・「こと」語彙は、決して主観的な偏向を多く含むものではなく、一作品の総語彙の傾向を、か

なり正確に反映しているものと推定される。

2 枕草子の語彙のうち、④は、前記のとおり、源氏物語を通じて一例も見られない語彙である。その意味では、枕草子独自の世界と見られる素材がここにあると言えよう。

「もの」語彙の約三二・六%、「こと」語彙の約二八・六%、合計約三二・九%が、④に相当する。

これを③と比較してみる時、一見して、④の特殊性が窺えるであろう。このように、「もの」語彙・「こと」語彙は、作品の語彙特性を示すものと認められる。

3 第一表によれば、源氏物語では、名詞と対応する「もの」「こと」に限ってみると、「もの」は、二二七回、「こと」は一六七回にわたって、「文型処理」的方法の適用を受け、それに応ずるだけの名詞を見せてくれたものではあるが、それでは、二二七個、一六七個の異り語を採集し得たかと言つと、そうは言えない。何故かと言えば、同形の語が何度も抽出された場合があること、および文型(1.2) (1.3) (2.2) (2.4) (2.5)においては、「もの」「こと」という語詞自体が、「もの」語彙・「こと」語彙に該当してくることが、等によるからである。

そこで、「文型処理」的方法の適用を受けた「もの」「こと」に占める、「もの」語彙(異り語合計)・「こと」語彙(異り語合計)の比率を調べると、第三表のとおりである。

【第三表】

①「文型処理」的方法の適用を受けた回数	②「文型処理」的方法の適用を異り語	源氏物語		枕草子	
		出現率 ①	%	出現率 ②	%
①	②	53.3	%	200.9	%
①	②	1.80	%	2.0	%
①	②	55.7	%	50.0	%

第三表によれば、源氏物語では、「もの」という語詞が平均一・八八回、「文型処理」的方法の適用を受ける毎に、一語の割合で、異り「もの」語詞が現われることになる。一方、枕草子では、〇・五回に一語という異常な現われ方をしている。この原因としては、枕草子の「～ものは」「～もの」で始まる八〇段に及ぶ類纂部が大きく作用していると推測される。たとえば、第二三段（日本古典全書本・96ページ）には、次のような叙述がある。

すさまじきもの、風ほゆる犬。春の網代。三四月の紅梅の衣。牛死にたる牛飼。ちご亡くなりたる産屋。火おこさぬ炭櫃。地火燼。博士のうちつつき女兒生ませたる。方違に行きたるに、あるじせぬところ。

というように、「もの」が一回用いられるに当り、「もの」語彙の名詞は、実に入語を数えるのである。これは、事新しく言うまでもなく、文体上の特徴を物語る一現象であろう。

そこで、仮に、これら類纂部を除けば、どのような変化が起こるかを見ると、第二表の「もの」語彙は三四語詞に減じ、第三表では、〇・八八回に一語詞の割合、即ち一・三・三％の出現率となつて、その異常さの衰えることを知る。

更に、枕草子の語彙②については、「主殿司」一語詞を除いて、他はすべて、「～もの」で始まる類纂部において認められた語である。

4 第一表によると、両作品を通じて、「もの」語彙の名詞部では、文型〔I.11〕が他を抑えて多数を占めていることがわかる。この文型が、「もの」語彙を産み出す最も有力な母胎であると言えよう。そこで、〔I.11〕および、ちょうどその裏に相当する〔I.5〕とを、「定義型」文型と名付けようと思う。この「定義型」文型での「もの」が、名詞語彙を産み出す全「もの」の中で、どれだけの比率を占めるかを調べたのが第四表である。

【第四表】

源氏物語	枕草子	①〔I.11〕型 名詞部		合計	①/② (%)	
		源氏物語	枕草子		源氏物語	枕草子
105	95	227	105	46.3	89.6	

これによれば、枕草子が源氏物語に比べて、二倍弱の高率を示していることがわかる。第三表「もの」語彙の出現率に見られた差の、主たる原因は、ここに求められるであろう。これもまた、明らかに文体上の問題と言うべき事柄である。

文体に関して言うならば、源氏物語から帰納された文型は、第一

表に見るごとく、源氏物語の「もの」では「五種」、「こと」では「七種」にわたって現われるが、枕草子では、「もの」「こと」ともに、八種に過ぎない、ということもまた、注目せられるところである。これは、この面での源氏物語の文体の多様さを示すものであると同時に、他方、枕草子の文体の、この面での単純さを示す現象とも言えるであろう。

5 第三表の「こと」語彙の出現率を見ると、「もの」の場合とは、逆の現象を呈している。これは、「こと」語彙での、名詞と「動詞」の比率に関係があると思われる。「こと」が、「文型処理」的方法の適用を受けることによって、導かれてくる「こと」語彙は、第一表に見るとおりである。源氏物語では、「名詞」と「動詞」が一六七対一二二という、「名詞」の優勢を示す値が見られるが、枕草子では、逆に、一四対二二という「動詞」の優勢を示す値が見られるのである。こうした「こと」語彙の内容上の違いが、「こと」語彙での名詞の出現率に反映したものと考えられる。

6 かくて、「もの」語彙の名詞出現率における枕草子の優勢、「こと」語彙の名詞出現率における源氏物語の優勢という、両作品の対蹠的傾向を看取し得るのである。この現象は、作品全体における、「もの」と「こと」との使用度数にも関る事柄のごとくである。

第五表は、使用度数表である。

〔第五表〕

	もの			こと			合計
	修飾語を伴わない 用例	(%)	修飾語として の用例	(%)	修飾語を伴わない 用例	(%)	
源氏物語	560	41.6	787	58.4	167	3.6	4472
枕草子	172	36.0	306	64.0	10	2.2	453
				1347			96.4
				478			463

〔第六表〕

3231302928272625242322212019181716151413121110987654321	語
琵琶 末帳 秋帆 舟母 几娘 顔母 乳母 子師 法郎 調度 さいそぎ ことちひ 振程 音舞 声法 説たれ かち 者しき け女 男れ 事 人心	
○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○	源氏物語
○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○	枕草子
○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○	源氏物語
○ ○○○○	枕草子

当面関係のあるのは、それ／＼「被修飾語としての用例」である。源氏物語では、「こと」が「もの」より約五・七倍多いが、枕草子では、わずかに一倍強の差に過ぎない。

7 第六表は、両作品の共通語彙一覧である。更に、同じ語詞でも作品によって、また同じ作品でも場面によって、把握のしかたの異なるものが有るので、それをも一覽し得るようにしてある。

まず全体として気のつくのは、「こと」語彙が少なく、しかも、純粹「こと」語彙とでもいうべき語、たとえば、「もの」語彙の22「法師」以下に見られるような語が全く見当らない、ということである。これは、「もの」と「こと」の意義の違いによるところが多いらしく思われる。

即ち、複雑な現われ方を示している「一心」から「21廊」までの語詞と、「22法師」以下の語詞を比較する時、前者は、後者に比べて、抽象的なもの、動作的なもの、無形のものが多く見られ、後者には、有形の存在が多く並んでいることがわかる。このように、有形の存在が「もの」として認識せられている点で、両作品は同様であると言える。

しかし他方、前半の語詞に見られる対象把握の多様さは、ここに、作者の個性的な対象把握をのぞかせているのではないかと、想像させるに十分である。

「一心」から「3事」までは、両作品とも、「もの」「こと」の両範疇に入れている点共通する。この三語詞は、用例数も他を圧して多く、概念もまた広い。「4それ」以下に及ぶと、源氏物語に限って、「もの」「こと」の両範疇に入れている語詞が多く並び、枕草子では、両様の把握のされたのは、最初の三例を除けば、「4そ

れ」一語のみである。しかも、「それ」という代名詞は、本来、名詞をも動詞をも指示し得る語であるゆえ、「もの」「こと」両様に用いられても、不思議は無いと言うべきである。

殊に「16振舞」、「18おこなひ」、「19いそぎ」の三例は、動詞連用形と同形の、動作性をこめた名詞であって、源氏物語によってわたくしの調べたところでは、かかる名詞は、本来、「こと」語彙に属するはずのもののように考えられるが、この表に見るごとく、枕草子と源氏物語とで、はっきりした対立を見せている。これは興味深い事実である。

四むすび

以上述べたところから、結論を導き出すと、次のようになるであろうか。

(1) 「もの」語彙・「こと」語彙という把握は、その作品の語彙特性を把握する上で有効である。

(2) 「もの」語彙・「こと」語彙には、言語主体の個性的な対象把握が反映する。

(3) 「文型処理」的方法は、文体に関する問題と深く関係する。(源氏物語は、「こと」型文体、枕草子は「もの」型文体とでも名付けられよう。)

(4) 「もの」語彙・「こと」語彙の量を、更に増やす方法を探求せねばならない。

(40・12・6)

— 広島大学大学院学生 —